

御製 五首

平成十七年

歳旦祭

明け初むる賢^{かしこ}所の庭の面は雪積む中にかがり火赤し

サイパン島訪問 二首

サイパンに戦ひし人その様を浜辺に伏して我らに語りき
あまたなる命の失せし崖の下海深くして青く澄みたり

千振^{ちふり}開拓地を訪ねて

たうもろこしの畑続ける那須山麓かの日を耐へし開拓者訪^とふ

千振開拓地は、終戦後の昭和二十一年に満州からの引揚者により那須山麓の高原に開墾された地域で、千振の名は満州における千振開拓団の名称に因んでいる。

告期の儀を迎へ

嫁ぐ日のはや近づきし吾子と共にもくせい香る朝の道行く

第五十六回全国植樹祭

茨城県

残りゐる平地ひらちの林守らむと潮来いたこに集ひ苗木植ゑたり

第六十回国民体育大会秋季大会

岡山県

桃の実の二つに割れし間より岡山国体の選手入り来る

第二十五回全国豊かな海づくり大会

神奈川県

魚の住む海保ちたる横浜の港につどひ真鯛放てり

皇后陛下御歌 三首

平成十七年

御料牧場にて

牧の道銀輪の少女ふり返りもの言へど笑ふ声のみ聞こゆ

平成十七年三月、高根沢御料牧場にいらした折、自転車ですつと先を行かれた内親王様方が、ふり返って何かを告げようとしておられるのだが、言葉は定かには分からず、ただ楽し気な笑い声だけが届いて来る様をお詠みになられている。

サイパン島

いまはとて島果ての崖踏みけりしをみな足裏思へばかなし

終戦六十年に当たる平成十七年六月、両陛下はサイパン島に慰霊の旅を果たされた。この御歌は、絶望的な戦況の中で島の果ての断崖から身を投じていった女性たちのことを思われてお詠みになった御歌である。

紀宮

母吾を遠くに呼びて走り来し汝を抱きたるかの日恋ひしき

平成十七年十一月、紀宮殿下は黒田慶樹様と結婚された。これは、お小さいころの宮様との日々を思い起こされ、嫁ぎ行く宮様に思いを寄せてお詠みになった御歌である。